

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21320017

研究課題名（和文）

「生きがい感」を高める教育の開発と科学的評価

研究課題名（英文）

Development and Assessment of Education to Inculcate Meaning in Life

研究代表者

ベッカー カール (BECKER CARL. B)

京都大学・こころの未来研究センター・教授

研究者番号：60243078

研究成果の概要（和文）： 目的意識や前向きな姿勢、倫理観などを高める教育を研究した。対象は教室の生徒や学生をはじめ、家庭内の親子、病院の新看護師等を含んだ。方法は、例えば講義やグループワーク、文学作品やアニメ、さらにはイメージトレーニングや瞑想法まで利用した。それらの影響は、主観的感想のみならず、唾液中の活性アミラーゼでも測ってみた。分析は今後も続くが、講演や書籍出版で詳細な成果を還元する計画である。

研究成果の概要（英文）： Our research developed and evaluated education to instill ethical sense of purpose and meaning in life, targeting not only schoolchildren and students but also home education and nurses newly employed by hospitals. The education included not only lectures and group discussions, but used literature and *anime*, and even mindfulness meditation, which we evaluated using salivary stress levels. We shall continue to analyze and publish our results.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2010年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2011年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2012年度	3,200,000	960,000	4,160,000
年度			
総計	13,800,000	4,140,000	17,940,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：生きがい感、いのち教育、SOC、グリーフケア、生命に対する畏敬の念、ストレス低減、コミュニケーションスキル、生と死

1. 研究開始当初の背景

問題群として、世代共通の課題は自殺であり、世代別では子ども世代ではいじめ問題やいのちの希薄感、成人世代では職場関係や燃え尽き感、高齢者では過剰医療依存症が派生している。青少年非行や自殺、過剰医療依存は一見無関係に見えても、実は同じルーツに起因する。このことは社会心理学や法医学で

は周知の事実で、過去一世紀の研究により証明されている。アノミーは、直接的には自殺、非行、暴力、殺人など不可解な犯罪の主原因となり、間接的には人体の免疫力の低下、過剰医療依存の増加、寿命の短縮に影響を与える (E. Durkheim)。現代の我国は、不可解な自殺・非行・犯罪と過剰医療依存とに直面している。その根本原因は生きがい感・価値観

の喪失であり、それらの再構築なくして医学や犯罪学の枠内だけでは対処は不可能な状況である。

2. 研究の目的

本研究は、宗派宗教ではなく、伝統的叡智に基づく生き方・生きがい感を培う、広義の宗教的教育を目指した。

我が国の教育が直面している問題群の主原因であるアノミー（目的喪失・没価値状況・無意味感）に対して、生きがい感を客観的に高める「スピリチュアル教育を基盤におく生きがい感教育プログラム」を考案・実践し、社会科学調査と生化学的評価を行い、さらにe-ラーニング教材を作成・発信することにより題群への打開を目的とした。

3. 研究の方法

アプローチとして倫理道徳教育の枠を越え、(A)理論構築(B)プログラム開発(C)教育実践(D)客観的評価(E)フィードバックを行う宗教と科学を統合させた総合的取り組みである。本研究遂行のために宗教、倫理、医学・医療、教育の学際的研究組織により、これまでの研究成果を発展展開させた。

研究機関に開催した研究会は4年間で12回であった。また、セミナー・講演会等は国際セミナー2回、国内セミナーは4回であった。それらの概要を以下に記す。

【国際セミナー】

- ・2011年7月29日、東京大学において「お産をめぐる喪失と生きがい」と題するシンポジウムを主催。国内外招聘者による講演とパネル・ディスカッションが行われた。
- ・2012年3月11日、上越教育大学において、「アジアの自然災害と私たちにできること～1年後の3・11にて～」を、精華大学文学部教授樊富民氏を招へした。

【国内セミナー・講演会】

- ・2009年7月4日、上越教育大学にて「幸せに生きる」
- ・2010年6月24日、上越教育大学にて「学校教育で、思いやり感は育めるか」
- ・2011年7月9日、上越教育大学にて、「ストレス社会を生きる、ストレス予防と対処法」
- ・2012年7月12日、上越教育大学にて、「生きがいを高めるとは～よりよく生きるために～」

【研究会議】

第1回 2009年5月23日 於東京大学
各自が研究計画を発表し、その内容を踏まえて、いかに個別の研究を統一テーマのものと関連づけていくかを検討した。

第2回 2009年7月10日 於京都大学
各自が研究の進捗状況を報告後、ディスカッション。最初の2年で理論構築ないし教育プログラムの開発を目指すことを、具体的な目標設定とすることを確認した。

第3回 2009年10月9日 於京都大学
各自が研究の進捗状況を報告後、ディスカッション。生きがい感、SOC（首尾一貫性）、スピリチュアリティの関連などについて、特に議論された。

第4回 2010年2月27日 於赤倉ホテル
各自が2009年度の研究成果を報告後、ディスカッション。また、来年度の研究の展望を全員で議論した。

第5回 2010年9月3日 於東洋大学近辺喫茶店
各自が研究の進捗状況を報告後、ディスカッションを行った。

第6回 2011年1月28日 於京都大学
各自が2010年度の研究成果を報告後、ディスカッション。また、来年度の研究の展望を全員で議論した。

第7回 2011年4月22日 於京都大学
各自が研究の進捗状況を報告後、ディスカッション。7月29日に東大で開催するシンポジウムの準備状況について報告があった後、注意点や改善点を議論した。

第8回 2012年1月27日 於京都大学
各自が2011年度の研究成果を報告後、ディスカッション。また、来年度の研究の展望を全員で議論。加えて、「生きがい感」の定義についてあらためて議論し、コンセンサスを築くことを目指した。さらに、3月11日に上越教育大学で行われる国際セミナーについて概要説明があった。

第9回 2012年6月3日 於名鉄ニューグランドホテル
各自が研究の進捗状況を報告後、ディスカッションを行った。

第10回 2012年9月6日 於名鉄ニューグランドホテル
各自が研究の進捗状況を報告後、ディスカッション。最終的な研究成果を書籍化することが発案され、その方向性に関する意見交換を行った。

第11回 2012年11月5日 於京都駅近辺喫茶店
各自が研究の進捗状況を報告後、ディスカッション。研究成果の書籍化について、具体的な構成の検討を進めた。

第12回 2013年3月30日 於キャンパスプラザ京都
各自が2011年度の研究成果を報告後、研究成果を具体的にどのように書籍にまとめ、社会に還元していくかを検討し、およその方向性を定めた。

4. 研究成果

生きがい感には、まず周囲と良好な人間関係を持ち、その組織に対する好意的な「帰属意識」が大事である。ただ、その良好な人間関係や帰属意識のためには、十分なコミュニケーション能力が大前提となる。逆に言えば、十分なコミュニケーションを図ることができなければ、所属する家族や会社も上手く機能せず、「生きがい感」以前の問題が大きくなる。従って、生きがい感を教えるためには、先ず、十分なコミュニケーションを図るための教育や思考法が不可欠である。様々な立場や現場にてコミュニケーションを教える方法を、コミュニケーションに関する書物を訳したり、書いたりしてきた、谷田憲俊が紹介した。

これまでの研究では、「生きがい感」は個人によるものが大きいと、個人だけが感じられたら良い、個人以外の根拠は要らない」という誤解を招きかねない側面があった。そこで、倫理教育や宗教的教育の権威である岩田文昭が、個人を越える意識・気付き・倫理観に関する部分の研究を担当した。その研究によると、生きがい感は、単なる個人の満足感ではなく、自分より大きな存在や力に対する念が重要な役割をしめる。しかし、大きな目標を持った場合、何を目標にしても良いというわけではない。例えば、ナチスや特攻隊が、「国の為に戦う」という生きがい感は、非常に高いと言われている。しかし、兵士にとって、前述の生きがい感が任務の原動力になったとしても、倫理的な基盤がない以上、結果的には、兵士本人のみならず、一般市民や世界全般の悲劇に繋がってしまう。

そこで岩田の研究では、倫理観を生きがい感以上に育てる教育を土台にして、生きがい感を位置付ける重要なパースペクティブを提供した。岩田の研究を通じて、生命の大切さが浮き彫りになる。日本人が大家族で生活をしていた頃には、自分の手で食物を作り、自宅で年老いた家族を看取ったので、生と死は抽象的理論ではなく、身を以て体験される現実であった。しかし、自給自足生活とは程遠い、核家族単位で生きる現代人にとっては、生も死も抽象的で分からないと思いかねない。

「若者が生と死を知らないようでは、本当の意味の生きがい感を感じられない」というのであれば、そのような若者に対し、どのように生と死について教育できるのだろうか。情報が飽和状態にある現在、人間は自らが経験しなくても、文学や映画などの「体験」を通して、様々な事を学べる。山崎浩司は、マンガを題材として、若者の生と死への関心と理解を高める教育を提唱している。山崎が提案するように、マンガを上手く利用できれば、魅力的な教育方法だと言える。

一方、生きがい感と深い関連性がある「燃え尽き」には、二通りの経過が考えられる。一つには、目的が分からないため、やりがいを感じられず、イヤになってしまうものである。もう一方には、何らかの仕事のやりがいを感じられた所で、勤勉・誠実にその仕事に集中してしま

うあまりに、疲れ果てて倒れてしまうケースである。一般的には、やりがいを感じる職人には燃え尽きが少ないとされるが、好きな仕事であっても、休息なく役割をこなし過ぎて、燃え尽きが起こる場合もある。

そこで、得丸定子が研究するようなストレス軽減法、例えば、「マインドフルネス・メディテーション」が重要な役割を果たす。マインドフルネス・メディテーションは、集中力を増しながら、自力的に疲労感を減らし、さらには与えられた状況に対する「有り難み」を感じさせ、現状を受け入れやすくなる効果もあるとされている。学生の勉強効率を上げたり、成人のストレスを減らしたりするためには、生きがい感そのものには直結しなくても、その重要なセルフケアと言えよう。

介護職や看護職の燃え尽きは、離職のみならず、医療ミスや患者に対する冷淡な態度に及ぶ。優秀な介護、看護人材が慢性的に不足している現在、燃え尽き予防は急務である。だが、事前に誰が燃え尽き易いか、そして燃え尽き易い介護者や看護師をどう教育するかは、今後益々重大な教育課題となる。なお、分析結果等は、前述した「新人看護師のストレス予防とSOC改善調査」と「ストレス予防研究と教育」を合併して実施する、次年度の研究に活かしていきたい。また、本研究の成果は、少しでも国民に還元・貢献したいと思う。特に研究最終年度は、研究のまとめを行ったと同時に、研究成果の書籍出版に向けた研究を進めた。

最終年度の研究概要を研究分担者ごとに以下に記す。研究代表者のベッカーは、病院と学校という現場を対象にストレス低減のセミナー・講演会を開催するとともに、ストレス対処能力、SOC尺度、バーンアウト尺度等、質問紙調査を実施した。この新人看護師への横断的・長期的SOC調査は1000人にも及び、世界に類を見ないので、看護師の人間関係・職に関する貴重なデータを得た。引き続き、そのデータを分析した上、看護師のストレス軽減や燃え尽き予防プログラムを開発し続ける。

特に最終年度では、得丸は児童生徒・保護者・社会人を対象とした「マインドフルネス瞑想」の出前授業を行い、瞑想によって、ストレス低減や生き方の改善、生きがい感への気づきが生じることを感想文分析から探った。岩田は、第一に、新学習指導要領のもとで刊行された中学校社会の教科書とその指導書の分析を行った。第二に、「生命に対する畏敬の念」が学校教育においていかなる意味を有しているかについて、継続研究を深めた。国語の教科書でよく教材として用いられている宮沢賢治や立松和平の作品において、生命の根源に関わる教育の実践例がなされていることを探求した。

山崎は、神谷美恵子、飯田史彦、近藤勉などによる「生きがい」に関する研究を検討し、「生きがい感」を定義すべく考察を行った。また、齋藤孝の『スラムダンクを読み返せ』を参考に「生きがい感」を漫画から読み取る方法について理解を深めた。さらに、実際に井上雄彦のマンガ『バガボンド』を題材に、いかにそこから

「生きがい(生きる意味)」を読み取れるかを論考にまとめた。

4年間の本研究では、生きがい感を妨げる要因と生きがい感を育める要因を調査対象にして、様々な現場や方法で、生きがい感を向上させる教育実践を試みてきた。その成果は既に随所で発表・報告を行っているが、引き続き、公開講演や書籍出版にて詳細な成果を還元する計画である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計35件)

①得丸定子 他「公認されない悲しみへのケア—大学生の人工妊娠中絶について」『上越教育大学研究紀要』32: 2013年 295-308. (査読有り)

②岩田文昭「生命の教育を考える—肯定と否定のダイナミズム」『点から線へ』60: 2013年 78-111. (査読有り)

③山崎 浩司「医療研究と質的研究——その関係に見る苦難と意義」『質的心理学フォーラム』23: 2013年 26-35. (査読なし)

④カール・ベッカー「祈りの研究」『Mind- Body Science』4: 2012年 16-20. (査読なし)

⑤カール・ベッカー「死と向き合った時にあらわになる日本人の基礎的宗教観」『緩和ケア』22: 2012年 207-211. (査読有り)

⑥子安増生編 (+カール・ベッカー他)「幸福感の国際比較研究」『Japanese Psychological Review』(心理学評論刊行会) 55: 2012年 70-89. (査読有り)

⑦岩田文昭「学校で生と死をいかに教えられているか」『寺門興隆』7: 2012年 104-111. (査読なし)

⑧岩田文昭「『生命に対する畏敬の念』に関する教育の意義」『道徳と教育』56: 2012年 176-178. (査読有り)

⑨岩田文昭「公教育で宗教をどう教えたらいのか」『虹』(育鵬社通信) 21: 2012年 8-10. (査読なし)

⑩岩田文昭「スピリチュアルケア、グリーフケア」『宗教と倫理』12: 2012年 21-31. (査読有り)

⑪山崎 浩司「死生を支えるコミュニティの開発」『老年精神医学雑誌』23: 2012年 1194-1200. (査読有り)

⑫Becker, Carl「Neuroethics, Bioethics, and Health」『Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine』5: 2011年 5-38. (査読有り)

⑬カール・ベッカー「日本の叡智に学ぶストレス軽減法」『日本人にとっての看取りとその意味』『ABC ラジオ〜ちょっといい話』10: 2011年 62-65, 87-90. (査読なし)

⑭カール・ベッカー「死と終末期とどう向き合うか」『精神医学史研究』15(1): 2011年 18-28. (査読有り)

⑮カール・ベッカー「臨床における意味と物語の復権」『仏教看護・ビハーラ』6: 2011年 11-41. (査読有り)

⑯カール・ベッカー「日本仏教の歴史から垣間見る現代的役割」『寺門興隆』148: 2011年 50-53. (査読なし)

⑰谷田憲俊「患者と家族の緩和ケアを支援する精神的ケア」『大阪保険医雑誌』4: 2011年 22-27. (査読有り)

⑱Tanida N.「Denial of death in contemporary Japanese - from the traditional view of life and death and unrealistic expectations of modern medicine」『Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine』5: 2011年 55-75. (査読有り)

⑲谷田憲俊「がん患者の在宅ケア：ここ100年間とこれからの展望」『ホスピスケアと在宅ケア』19: 2011年 2-5. (査読有り)

⑳谷田憲俊「災害時の一般医による医療支援の留意点」『ホスピスケアと在宅ケア』19: 2011年 305-315. (査読有り)

㉑得丸定子「マインドフルネスと学校教育—ノルウェーと米国の報告」『仏教看護・ビハーラ』6: 2011年 167-186. (査読有り)

㉒得丸定子「ペットロス(上) 日本人の動物観とペットロス」『SOGI』122: 2011年 46-57. (査読なし)

㉓岩田文昭「国公立学校における宗教教育の現状と課題」『宗教研究』85(369): 2011年 139-163. (査読有り)

㉔岩田文昭「近角常観と嘉村儀多—新出資料の紹介を中心に」『大阪教育大学紀要 第I部門人文科学』60(1): 2011年 75-91. (査読有り)

㉕岩田文昭「三木清と武内義範——「宗教哲学」研究の先入見」『宗教哲学研究』28: 2011年 44-50. (査読有り)

㉖山崎浩司「研究の技術(3): 質的研究の技術1—基本編」『日本認知症ケア学会誌』10(1): 2011年 106-113. (査読有り)

②⑦ Tanida N, Ito M, Turale S. 「Perceptions of Japanese patients and their family about medical treatment decisions.」『Nursing and Health Sciences』12: 2010年 314-321. (査読有り)

②⑧ 得丸定子・佐藤英恵・郷堀ヨゼフ「人生観によるペットロス。ペット葬の関係について」『上越教育大学紀要』29: 2010年 257-268. (査読有り)

②⑨ 岩田文昭・碧海寿広「宮沢賢治と近角常観—宮沢一族書簡の翻刻と解題」『大阪教育大学紀要(人文科学)』37(1): 2010年 121-140. (査読有り)

③⑩ 山崎浩司「インフォーマルケア論と相互作用論の視座—死と看取りの社会学の展望」『社会学年報』39: 2010年 45-49. (査読有り)

③⑪ 山崎浩司他「青森県民のがん検診に関する認識と経験」『保健師ジャーナル』66(4): 2010年 358-365. (査読有り)

③⑫ カール・ベッカー「心は元気か」『教委連だより』(京都市市町村教育委員会連合会) 147: 2009年 1-19. (査読なし)

③⑬ 谷田憲俊「死病と恐れられた結核」『薬のチェックは命のチェック』35: 2009年 88-93. (査読なし)

③⑭ 岩田文昭「阿闍世コンプレックスと近角常観」『臨床精神医学』38(7): 2009年 915-919. (査読有り)

③⑮ Yamazaki H, Slingsby B, Takahashi M, Hayashi Y, Sugimori H & Nakayama T. 「Characteristics of Qualitative Studies Published in Influential Journals of General Medicine: a critical review」『BioScience Trends』3(6): 2009年 202-209. (査読有り)

[学会発表] (5名で4年間、計222件)

* 上下の出版物に多く含まれるので、ここでその記述しない

[図書] (計25件)

① カール・ベッカー、稲盛和夫編『如何確定21世紀新倫理現』所収「人間社会を持続可能にさせる倫理の役割」海南出版社(中国語訳)、2012年 97-154

② Carl Becker, Jonathan Watts & Yoshiharu Tomatsu, Eds. 『Buddhist Care for the Dying and Bereaved』所収「Challenges of Caring for the Aging and Dying」Somerville, MA: Wisdom Press. 2012年19-36

③ 岩田文昭『宗教学事典』島菌進・気多雅子・鶴岡賀雄・星野英紀・池上良正編所収「宗教情操」丸善、2012年、76-79

④ 山崎浩司他、清水哲郎・浅見昇吾・アルフォンソ・デーケン編著、『人生の終わりをしなやかに』三省堂、2012年 144-185

⑤ カール・ベッカー、『寄り添いの死生学』戸松義晴編所収、「生と死を通じて浄土を理解する」2011年、89-129

⑥ カール・ベッカー、『スピリチュアルペインに向き合う』窪寺俊之編所収、「医療が癒せない病」聖学院大学出版会、2011年13-70

⑦ Carl Becker 「Aging, Dying, and Bereavement in Contemporary Japan」[in Slovenian], 『Zivljenje, smrt in umiranje v medkulturni perspektivi』Razprave Filozofska Fakulteta, Ed. Maja Milcinski. Ljubljana, Slovenia 2011年29-40

⑧ 谷田憲俊、大下大圓、伊藤高章監修『対話・コミュニケーションから学ぶスピリチュアルケア〜ことばと物語からの実践』診断と治療社、2011年、235

⑨ Carl Becker. “Economy and the Environment: How to Get What We Want,” in 『Adaptation and Mitigation Strategies for Climate Change』Tokyo/Berlin: Springer, 2010年、157-167.

⑩ カール・ベッカー「アメリカの死生観教育〜その歴史と意義」、『死生学とは何か』の韓国語訳 Seoul: Hanul Publishing Company、2010年、101-133

⑪ カール・ベッカー『地球文明の危機』稲盛和夫編所収、「人間社会を持続可能にさせる倫理の役割」、東洋経済新報社(東京)2010年、283-303

⑫ 岩田文昭「第三共和政初期の公教育—ライシテとスピリチュアリティ—」、鶴岡賀雄・深澤英隆編『宗教史とスピリチュアリティ—源流と展開上』リトン社、2010年 31-52

⑬ 山崎浩司「日常のなかで死にゆくために—在宅死・在宅看取りを超えて」清水哲郎・島菌進編所収『ケア従事者のための死生学』ヌーヴェルヒロカワ(東京)2010年、158-171

⑭ 山崎浩司『よくわかる医療社会学』中川輝彦・黒田浩一郎編所収、「死の意識」「インフォーマルケア」「アンセルム・ストラウス」ミネルヴァ書房(京都)2010年、38-41、138-141、192-195

⑮ カール・ベッカー、河合俊雄編『ころにおける身体・身体におけるころ』所収「指定討論1: こころのはたらき」日本評論社(東京)2009年、123-129、150-152

⑩カール・ベッカー、山折哲雄編『日本人と「死の準備」』所収「死後の世界の様相」角川SSC新書（東京）2009年、157-169

⑪カール・ベッカー、岩崎利一編『釣耕苑対談集』所収「21世紀のキーワードは「抑制」」巴心文庫、2009年、206-219

⑫カール・ベッカー、子安増生編『子安増生編『心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学』所収、「リスク社会と幸福感を歪曲した言説～仏教的な批評」ナカニシヤ出版（京都）、2009年、190-192

⑬カール・ベッカー・弓山達也編『いのち・教育・スピリチュアリティ』所収、「いのち教育と日本のスピリチュアリティ」大正大学出版会（東京）2009年、101-138、277-301

⑭カール・ベッカー編『愛する者の死とどう向き合うか～悲嘆の癒し』所収、「死の現状—ホスピスから「生と死の教育」へ」晃洋書房（京都）2009年、125-158、201-208

⑮谷田憲俊、『感染症学』第四版、診断と治療社、2009年、581

⑯谷田憲俊、カール・ベッカー、弓山達也編『いのち 教育 スピリチュアリティ』所収、「失うことは学びと成長につながる」大正大学出版会、2009年 3-65

⑰得丸定子（北陸家庭科授業実践研究会編）『子どもの思考を育む家庭科の授業』教育図書（東京）2009年、所収「実践批評」68-69、「世代間交流活動：じい、ばあ、こんにちは！」88-91

⑱得丸定子、カール・ベッカー、弓山達也編『いのち・教育・スピリチュアリティ』所収、「学校で行う「スピリチュアル教育」の手がかり」大正大学出版会（東京）2009年、69-100

⑲岩田文昭、カール・ベッカー、弓山達也編『いのち・教育・スピリチュアリティ』所収、「道徳教育とスピリチュアル教育」大正大学出版会（東京）2009年、39-161

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ベッカー・カール・ブラドリー

(BECKER CARL BRADLEY)

京都大学・こころの未来研究センター・教授

研究者番号：60243078

(2) 研究分担者

谷田 憲俊 (TANIDA NORITOSHI)

山口大学・大学院医学系研究科・教授

研究者番号：30140437

得丸 定子 (TOKUMARU SADAKO)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：00293267

岩田 文昭 (IWATA FUMIAKI)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00263351

山崎浩司 (YAMAZAKI HIROSHI)

信州大学・医学部・准教授

研究者番号：30378773